

海外舞踊文献紹介

副島博彦

おもに1990年以降に刊行されたドイツの舞踊に関する文献を、ドイツ表現舞踊とタンツテアターを中心に紹介する。

0. 事典、雑誌

ドイツ語圏では、コーエンのダンス・エンサイクロペディア(1998)やラルースのダンス事典(1999)に相当するような舞踊事典は刊行されていないが、1997年に完結した7巻本の *Pipers Enzyklopädie des Musiktheaters*, Piper Verlag, 1986-97は、約200人の振付家の項目を設けるなど、舞踊も視野に入れた編集となっている。また、バレエの作品解説事典として定評のある *Reclams Ballett Führer*, 1956, 12. Aufl. 1996, Reclam の一種の補遺としてホルスト・ケグラーがまとめた Horst Koepler: *Kleines Wörterbuch des Tanzes*, Reclam, 1999 は、現代ドイツの舞踊の状況も反映した手頃な舞踊用語事典だ。

1980年代後半、ドイツ語圏ではダンスの隆盛とともにダンス専門誌の創刊が相次いだ。まず、*tanzdrama* (季刊) は、1987年にヘートヴィヒ・ミュラーがマリー・ヴィグマン協会と共同で、ドイツ表現舞踊を中心に「舞踊史と舞踊の現況との関係を明らかにすること」を目的に創刊した研究雑誌で、毎号掲載される舞踊史上の人物を紹介する論文はじめ、ドイツ表現舞踊研究の基本的なデータや研究の現状を知るには格好のソースとなっている。1998年には、パトリツィア・シュテッケマン、カーチャ・シュナイダーが共同編集者として加わり、公演評はじめコンテンポラリー・ダンスへの目配りもきくようになってきた。また、1988年にそれぞれオーストリアとスイスで創刊した *tanz Affiche* (年10回刊) と *Tanz der Dinge* (隔月刊) は、それぞれの地域のダンスの動向を捉えるには不可欠な雑誌といえるだろう。いっぽう、1986年に創刊した *tanz aktuell* は、1994年に *Ballett International* (1982-) と合同して *Ballett International / Tanz Aktuell* (月刊) となった。ドイツの舞踊の現況をもっとも反映した同誌はその後、ヨーロッパの代表的な舞踊専門誌のひとつに成長した。

1. ドイツ表現舞踊

ドイツ表現舞踊の成立の契機として、19世紀末に始まる生活改革運動 (*Lebensreformbewegung*)

と呼ばれるオルタナティブ運動、世紀転換期のヴァリエテ、草創期のモダン・ダンスを挙げることができるだろう。生活改革運動にみられる自然や身体への覚醒は、田園都市ヘレラウに開設されたジャック＝ダルクロワズのリトゥミック学校やモンテ・ヴェリタのラバン学校を通じて、マリー・ヴィグマンを軸にドイツ表現舞踊の成立へと連なっていく。

ドイツ語圏では、現代的な視点に立ってドイツ表現舞踊について包括的に記述した著作は未だ出ていないが、1986年にバイロイトで開催されたシンポジウム〈表現舞踊〉に基づいた Gunhild Oberzaucher-Schüller (Hg.): *Ausdruckstanz — Eine mitteleuropäische Bewegung der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts*, Florian Noetzel Verlag, 1992は、現代の表現舞踊研究の出発点のひとつとなった論文集だ。また、1993年の〈Weltfrieden — Jugendglück〉展に際して出版された Hedwig Müller, Patricia Stöckemann (Hg.): *... jeder Mensch ist ein Tänzer — Ausdruckstanz in Deutschland zwischen 1900 und 1945*, Anabas Verlag, 1993に収録されている編者2人の基調論文は、表現舞踊のアウトラインを的確に描き出しており、邦訳が、『ドイツ・ダンスの100年—映像でみる身体イメージと表現主義』

(東京ドイツ文化センター／パークタワー・アートプログラム, 1996) に収録されている。いっぽう、この時期のドイツの身体文化を、ヌーディズム、体操、ダンス、写真、批評など、幅広いスペクトルで分析し、「生命力にあふれた、歴史上ユニークな近代のアイデンティティ」の形成として描き出す Eric Toepfer: *Empire of ecstasy — nudity and movement in German body culture, 1910-1935*, University of California Press, 1997は、表現舞踊をこの時期の身体文化全般はじめ、より広いコンテクストで捉えるための必読書といえるだろう。

1. 1 ヘレラウとモンテ・ヴェリタ

ドレスデン郊外に建設された田園都市ヘレラウに関する研究文献は、ドイツ再統一後、質量ともに飛躍的に充実した。ヘレラウとダルクロワズ学校との関係については、Karl Lorenz: *Wege nach Hellerau — Auf den Spuren der Rhythmik*, Hellerau Verlag, 1993にコンパクトに記述されている。リトゥミックや舞踊研究からのヘレラウにアプローチした文献としては、Reinhard Ring (Hg.): *Hellerau Symposium — Fragen zur Geschichte der Rhythmik*, Bundesverband Rhythmische Erziehung e.V., 1993がある。また、Songrid Hürtgen-Busch: *Die Wegbereiterinnen der rhythmisch-musikalischen Erziehung in Deutschland*, dipa-Verlag, 1996は、ヘレラウやベルリンなどのリトゥミック学校で教師を務めたニーナ・ホルターをはじめ4人の女性たちの生き方

を、資料やインタビューをもとに叙述し、フェミニズム論を援用しながら、彼女たちの女性としての自立、ダルクローズ、さらにはヘレラウの脱神話化を試みたものだ。その成否はともかく、ドキュメントの部分は一読に値する。

ラバン学校が開校されていたスイスの神秘主義コロニー、モンテ・ヴェリタについては、*Monte Verità — Berg der Wahrheit*, Armando Dado, 1980 や、Martin B. Green: *The Mountain of Truth — The Counterculture Begins, Ascona, 1900 — 1920*, University Press of New England, 1986以降目立った文献は出ていないが、1995年にフランクフルトで開催された展覧会のカタログに収録されている Pia Witzmann: “*Dem Kosmos zu gehört der Tanzende*”, in: *Okkultismus und Avantgarde. Von Munch bis Mondrian. 1900 — 1915*, edition tertium, 1995は、ダンスへのオカルティズムの影響を考察した好論文だ。また Giorgio J. Wolfenberger: *Suzanne Perrottet — Ein bewegtes Leben*, Quadriga Verlag, 1995 は、ジュネーヴでダルクローズのリトウミック開発に生徒として加わり、ヘレラウでリトウミック教師を務めた後、モンテ・ヴェリタのラバンのもとへ走ったシュザンヌ・ペロテットの伝記資料集だ。C. G. ユングは、彼女が教える身体運動に心理療法の効果を認め、ペロテットもセラピーとして実践した。このときのアシスタントがダンス・セラピーの創始者のひとりトウルディ・ショープだった。

1. 2 ヴァリエテとダンスの近代

世紀転換期のヴァリエテ・ダンサーたちをダンスの近代の担い手として再評価しているのは、1988年のリヨン・ダンス・ピエンナーレで光あふれるロイ・フルーのダンスを復元したブリギーダ・オハイムだ。彼女のロイ・フルー論 Gabriele Brandstetter, Brygida Ochaim: *Loie Fuller — Tanz · Licht · Spiel · Art Nouveau*, Rombach Verlag, 1989の共著者ブランドシュテッターは、Gabriele Brandstetter: *Tanz-Lektüren. Körperbilder und Raumfiguren der Avantgarde*, Fischer Taschenbuch Verlag, 1995で、世紀転換期の新しいダンスと文学の緊密な相互関係を読み解き、近代的な主体の表現とアヴァンギャルドの美学の形成の理解に独自の議論を展開している。また、オハイムが企画した展覧会のカタログ Brygida Ochaim, Claudia Balk: *Varite-Tänzerinnen um 1900 — Vom Sinnenrausch zu Tanzmoderne*, Stroemfeld Verlag, 1998には、クラウディア・バルクによるフェミニズム論的な視点に立ったヴァリエテからダンスの近代への補助線が引かれている。

イサドラ・ダンカンには、1902年と翌年のドイツでの成功を受けて、1904年、ベルリンで「自由舞踊学校」を創設したが、Frank-Manuel Peter (Hg.):

Isadora & Elizabeth Duncan in Deutschland, Wienand, 2000は、編者が館長を務めるケルンのドイツ・ダンスアーカイヴの新収資料などをもとに、ドイツにおけるダンカン受容を多角的に検証することで、従来のダンカン研究の空白を埋めるものだ。

1. 3 ヴィグマン、ラバン、ヨース

1986年には、生前マリー・ヴィグマンとも交友のあった高名な批評家による Walter Sorell: *Mary Wigman — Ein Vermächtnis*, Florian Noetzel Verlag, 1986と新進気鋭の舞踊史家の手による Hedwig Müller: *Mary Wigman — Leben und Werk der Grossen Tänzerin*, Quadriga Verlag, 1986の2冊の評伝が上梓されたが、1990年代にも、各々特色ある2冊の評伝が出版されている。Susan A. Mannig: *Ecstasy and the demon — feminism and nationalism in the dance of Mary Wigman*, University of California Press, 1993は、ヴィグマンの主要作品のひとつひとつをフェミニズム論と政治的な思考の枠組みを使って詳細に検討し、ヴィグマンとナチズムとの関係を分析した刺激的で魅力ある論考となっている。いっぽう、有名な伝記叢書の一冊として刊行された Gabriele Fritsch-Vivié: *Mary Wigman*, Rowohlt Taschenbuch, 1999は、日記、メモ類を手がかりにした初期ヴィグマンの自己形成の記述に力点が置かれている。

ルドルフ・ラバンの伝記 Valerie Preston-Dunlop: *Rudolf Laban — An Extraordinary Life*, Dance Books, 1998は、長年にわたってラバン研究に携わってきたラバンのイギリスでの高弟の手になるものだが、出典を一切記さない引用や、後述するナチズムと舞踊の関連資料を等閑視するなど、評伝としては問題を残していると思われる。

クルト・ヨースについては1985年の展覧会〈Kurt Jooss — Leben und Werk〉のカタログ Urs Leicht (Hg.): *Jooss*, Ballett-Bühnen-Verlag, 1985以降ドイツ語圏では目立ったモノグラフは公開されていないが、英語圏ではニューヨーク大学のスーザン・ヴァルターが⁸⁾、Suzanne K. Walther: *The Dance Theatre of Kurt Jooss*, Harwood Academic Publishers, 1993 と、*The Dance of Death — Kurt Jooss and the Weimar Years*, Harwood Academic Publishers, 1994を上梓しており、ヨース生誕100年にあたる今年シュテッケマンによる評伝 Patricia Stöckemann: *Etwas ganz Neues muss nun entstehen — Kurt Jooss und das Tanztheater*, Klaus Kieser Verlag, 2001も刊行予定となっている。また、代表作《緑のテーブル》に関しては、初演60周年を記念した学会の講演をもとにした Andy Adamson, Clare Lidbury: *Kurt Jooss — 60 years of The Green Table*, The University of Birmingham, 1994が刊行されている。なお、クルト・ヨースが設立に加わり、戦後、

ピナ・バウシュはじめ多くの舞踊家を輩出しているフォルクヴァング（芸術大学）については、Claus Raab: *Folkwang — Geschichte einer Idee Musik — Tanz — Theater*, Florian Noetzel Verlag, 1994が参考になる。

このほかの同時代の舞踊家に関する文献を挙げると、オスカー・シュレンマーのトリアディック・バレエについては、Dirk Scheper: *Oskar Schlemmer: Das Triadische Ballett und die Bauhausbühne*, Akademie der Künste, 1988が充実しており、ハラルト・クロイツベルクについては、Frank-Manuel Peter (Hg.): *Der Tänzer Harald Kreutzberg*, Edition Hentrich, 1997が、多数の新資料とともに、表現舞踊を代表するこの男性ダンサーを多角的に捉えた論文集として注目される。グレート・パルッカについては、Peter Jarchow, Ralf Stabel: *Palucca. Aus ihrem Leben — Über ihre Kunst*, Henschel Verlag, 1997という「暫定的」な伝記が刊行されている。また、1920年代ベルリンのキャバレで活躍したダンサーの評伝では、Frank-Manuel Peter: *Valeska Gert*, 1987, Edition Hentrich と Lothar Fischer: *Anita Berber — Tanz zwischen Rausch und Tod*, Haude & Spener, 1984が面白い。

さらに、1930年代から1960年代のドイツでもっとも重要な舞踊家のひとりドーレ・ホイアは、1980年代に入ると、ドイツ表現舞踊とタンツ・テアターを結びわばミッシング・リングとしても再評価されるようになったが、彼女については、Deutsches Tanzarchiv Köln (Hg.): *Dore Hoyer — Tänzerin*, Edition Hentrich, 1992がいまのところ唯一のモノグラフだ。

1.4 ナチズムと舞踊

ナチズムと舞踊という重いテーマは、ドイツの舞踊史研究のなかではいわば避けて通られてきた項目だったが、これに正面から取り組んだ Lilian Karina, Marion Kant: *Tanz unterm Hakenkreuz — Eine Dokumentation*, Henschel Verlag, 1996は、ドイツ舞踊史研究の必読書のひとつに加わったといえるだろう。2部構成の第1部は、舞踊家カーリーナの回想、カントによる第2部は、ナチスの文化政策と個々の舞踊家との相互関係を史料に基づいて記述した部分と初めて公にされた関係史料によって構成されている。例えば、1930年、ベルリンの国立歌劇場バレエ監督に就任していたラバンはナチスが政権を握った1933年、劇場の児童バレエ・コースから非アーリア人生徒の排除するが、それは、非アーリア人児童の就学が禁止される5年前のことになる。同じカントが、ナチ時代から戦後1949年までのマリー・ヴィグマンについて叙述した論考 *Mary Wigman — Die Suche nach der verlorenen Welt*, in: *tanzdrama* Nr. 25, 26, 1994は、前掲書と

ともに物議を醸したのはいうまでもないが、昨年ブリュッセルで出版された Laure Guilbert: *Danser avec le III^e Reich — Les danseurs modernes sous le nazisme*, Éditions Complexe, 2000は、この成果も取り入れた好著だ。ギルベールは、その前半部で、1910年から1934年までを舞踊という芸術が聖なる次元を探求したプロセスとして分析し、ナチ時代の「身体運動文化」を扱った後半部では、表現舞踊のパイオニアたちが目指したユートピアの神秘主義的な側面に焦点を当て、そこにみられる両義性、矛盾、権力闘争がナチ時代のドイツのダンスの運命に決定的な影響を及ぼしたと結論づけている。

2. タンツテアターとダンスの現在

2.1 タンツテアター

1920年代からラバン、ヨースらによって、彼らの新しい舞台芸術の総称として使われていたタンツテアターということだが、1970年代初めに、ピナ・バウシュ、ヨーハン・クレスニク、ゲアハルト・ボナー、ラインヒルト・ホフマン、ズザンネ・リンケなどによって再び使われるようになった。その後、ピナ・バウシュの成功と成果を背景に、当時の西ドイツではバレエを含む多くのダンス・カンパニーが自らをタンツテアターと呼ぶようになり、現在では、パフォーマンス・アーツとしてのダンス総体を指すことばとしても流通するようになってきている。Susanne Schlicher: *Tanztheater — Traditionen und Freiheiten. Pina Bausch, Gerhard Bohner, Reinhild Hoffmann, Hans Kresnick, Susanne Linke*, Rowohlt Taschenbuch Verlag, 1987は、ピナ・バウシュをはじめとするタンツテアター第一世代と呼ばれる振付家たちを取り上げた初のアンソロジーだ。ドイツ舞踊史をタンツテアターをキーワードに読み直そうと試みる Jochen Schmidt: *Tanztheater in Deutschland*, Propyläen Verlag, 1992は、非常にインフォーマティブな概説書だが、ドイツ表現舞踊から説き起こし、タンツテアター第一世代の振付家を個々に取り上げ、さらに、他のドイツの主要な振付家たちを、アウトサイダー、周縁者、同調者などとしてタンツテアターに回収してゆく記述がどこまで有効なのかは疑問が残る。

個々の振付家のモノグラフでは、ピナ・バウシュに関するものももっとも多い。Norbert Servos: *Pina Bausch — Wuppertaler Tanztheater oder Die Kunst einen Goldfisch zu dressieren*, Kallmeyer Verlag, 1996 (初版1984) は、ピナ・バウシュ作品の詳細な解説ハンドブック（といってもA4版2段組319頁）だが、1975年以前の作品が取り上げられていないこと、基調論文が初版のままであることを除けば、現在もっとも有用なモノグラフ

といえるだろう。ゲアハルト・ボナーについては、Edition Henrich (Hg.): *Gerhard Bohner — Tänzer und Choreograph*, Edition Henrich, 1991, また、ヨハン・クレスニクについては、Uta Ackermann (Hg.): *Johann Kresnik und sein Choreographisches Theater*, Henschel Verlag, 1999 と Ulrike Lehmann: *Johann Kresnik — Choreographische Skizzen und Zeichnungen 1973–1998*, Salon Verlag, 1999が³, クレスニク60歳を機に出版されている。

2.2 ダンスの現在

ドイツ語圏では、いわゆるコンテンポラリーダンスを扱ったモノグラフが出ることは未だまれだが、ジェンダー論を援用した Janine Schulze: *Dancing Bodies Dancing Gender — Tanz im 20. Jahrhundert aus der Perspektive der Gender — Theorie*, Edition Ebersbach, 1999は、例えば、サーシャ・ヴァルツの《トラヴェローグ三部作》、ロイド・ニューソンの《エンター・アキレス》、ウィリアム・フォーサイスの《オブ・エニー・イフ・アンド》など非常に異なったスタイルの振付作品を取り上げ、それらが、ジェンダーを反映するような身体イメージを演出し、それと同時に、そのイメージをずらし失効させている、とするような、脱構築的な作品分析の部分に読み応えがある。

ピナ・バウシュが登場したとき毀誉褒貶のなかで擁護者のひとりだった舞踊批評家ヨッヘン・シュミットが、皮肉なことに拒否反応を示して、「コリオグラフィーの終末」を宣言したのは1998年のタンツ・プラットフォームだったが、その傾向は、2000年のプラットフォームにも引き継がれ、ベルリン、フランクフルト、ハンブルクなどの非公立劇場を拠点に活動するグザビエール・ロワ、ジェローム・ベルなど奇怪な身体（像）を実験的な手法で提示する振付家たちは、最近では、ドイツ内外のフェスティヴァルでも頻繁に取り上げられるようになってきている。Helmut Ploebst: *No wind no word — Neue Choreographie in der Gesellschaft des Spektakels*, Kieser Verlag, 2001は、こうした1990年代後半以降に注目を浴びるようになったドイツ内外で活躍する振付家9人を取り上げた初めてのモノグラフだ。

平成12年度 舞踊学関係修士・博士論文題目一覧

論文題目	氏名	大学院名
修士論文		
・ダンスのためのミニシアターに関する研究 ～セッションハウスを中心に～	相馬 秀美	お茶の水女子大学大学院
・観光客が地域伝統芸能の伝承に及ぼす影響 ～郡上おどりを例に～	竹之下 たまみ	お茶の水女子大学大学院
・勅使河原三郎 (1953-) 研究 ～作品『NOIJECT』(1992)を中心に～	多胡 綾花	お茶の水女子大学大学院
・Janet. Absheadの舞踊分析法における解釈研究	池田 三鈴	お茶の水女子大学大学院
・アンナ・ハルプリン (Anna Halprin 1920-) 研究 ～Ritualとしての『Circle the Earth』を中心に	昆野 まり子	お茶の水女子大学大学院
・山海塾作品『卵を立てることから-卵熱』研究 ～「擬死再生」のモチーフを中心に～	塩田 靖子	お茶の水女子大学大学院
・コンタクト・インプロヴィゼーションのスキル研究	福本 まあや	お茶の水女子大学大学院
・モーリス・ベジャール (Maurice Bejart ; 1927-) 振付 『ボレロ (Bolero)』に関する研究	山田 素子	お茶の水女子大学大学院
・マシュー・ボーン (Matthew Bourne) 版 『白鳥の湖』に関する研究 ～古典改訂の視点から～	李 恩誠	お茶の水女子大学大学院
・田中泯 (1945-) 研究 ～農耕実践と並行する舞踊活動を中心に～	李 世珍	お茶の水女子大学大学院
・ブタベシュトのターンツハーズに関する研究	大塚 奈美	お茶の水女子大学大学院
・ダンスする身体のパフォーマンス的研究序説 -作品創造のエスノグラフィックな記述をもとに-	瀬尾 恭子	筑波大学大学院
・ダンスにおけるリズムに関する研究 -その文化的・社会的意義を中心に-	相浦 美歩	筑波大学大学院
・「あの世」の能	西浦 早苗	日本大学大学院
・身体と表現	小田原 真貴	日本大学大学院
・石井漠の舞踊観に関する一考察	菅原 優香	日本大学大学院
・インプロビゼーションとグループ・プレイングが幼児・ 児童に及ぼすメリット&リスク -佐伯クラスを巡る 研究私論	佐伯 美智子	日本大学大学院
博士論文		
・能における「見る」型の技法とその思想	原 郁子	お茶の水女子大学大学院
・日本舞踊における娘形技法の実証的研究	丸 茂美恵子	日本大学

(以上、平成13年8月31日までにご回答いただいた該当論文を掲載いたしました。)